

## 20世紀初頭におけるアカデミズムと部落問題認識 — 鳥居龍蔵の日本人種論と被差別部落民調査の検討から —

関 口 寛

本稿は、20世紀初頭の日本のアカデミズムにおける部落問題認識について考察するものである。その手がかりとして取り上げるのは、人類学者・考古学者の鳥居龍蔵によってなされた被差別部落民調査である。今日、鳥居龍蔵は東アジア各地のフィールドを踏査した研究者として、また大正期のもっとも有力な日本人種論である固有日本人説を唱えた学者として有名である。しかし彼は海外のみならず、日本国内でも各地へ調査に赴いている。なかでも被差別部落に対する調査を精力的に行っていたことは、今日あまり知られていない。彼は人類学の観点から、東アジア圏の人種関係の解明という壮大なテーマのなかに部落問題を位置づけようとした。その理解は彼の固有日本人説とともに当該期の社会やアカデミズムに影響を与えたといつてよい。本稿はまず、彼が国内で実施した部落民調査の概要を明らかにするとともに、これが彼の学問に与えた影響、さらにはその社会的反響について考察する。

### 1 はじめに

本稿は、20世紀初頭の日本のアカデミズムにおいて、部落問題がどのようにして研究対象として認知されるようになり、これを論じる枠組みが形成されていったかについて考察するものである。

当該期に部落問題の研究に着手し、初めて体系的な学問のなかに被差別部落民を位置づけようとした知識人に、鳥居龍蔵がいる。鳥居は固有日本人説と呼ばれる日本人種論を唱え、同論は大正期のもっとも有力な学説として広く社会に受容されたことで知られる〔寺田1975〕〔工藤1979〕。しかし彼がその学説に辿り着く過程において、精力的に部落問題研究に取り組んでいたことについては、これまでほとんど顧みられたことがない。また部落史研究のなかにおいても、彼の調査研究は歴史の本流から孤立したエピソードとして記憶されているに過ぎない。しかし本稿でみるように、その研究成果は新聞などのメディアにも取り上げられ、少なからず同時期の日本社会にインパクトを与えたこと

を確認しうる。

戦前期の部落問題研究においては、その先覚者として喜田貞吉が著名である。じつは喜多と鳥居は共に徳島を郷里とし、かつ同年輩で、共に東京帝大で学ぶなど、多くの接点を有している。また学問的にも両者は「日本民族成立論」を研究テーマとするなど共通点が多く、終生のライバル関係にあった。筆者の見解によれば、喜田の部落史研究には、そのパイオニア的存在であった鳥居の研究成果を強く意識した跡が窺われ、その関心は多分に鳥居によって触発されたといってもよい<sup>1)</sup>。戦前期の日本のアカデミズムは被差別部落にいかなる〈眼差し〉を注いできたのか。これを考察するためには、当該期の知識人のあいだで部落問題研究がどのように開始され、それがいかなる内実を備えていたのかを究明することが重要である。

鳥居龍蔵は1870年に徳島で生まれ、明治中頃から敗戦前の昭和期にかけて活躍した人類学者・考古学者である。彼は幼少期に学校教育に馴染めず、小学校を中退するものの、並外れた向学心により、独学で様々な語学や学問を学んだという。そうしたなか、雑誌をつうじて創立後間もない東京人類学会の存在を知る。人類学への興味をかき立てられた彼は、1886年、十六歳にして同会会員となっている。さらに坪井正五郎の知遇を得て1890年に上京、東京帝大・人類学教室の標本整理係となり、坪井の下で人類学研究に従事する。その後、助手、講師となり、坪井の死去の後、1922年には助教授、人類学教室主任となる。しかし24年にはその職を辞し、上智大学や國學院大學で教鞭をとる傍ら、私設の鳥居人類学研究所を主催。1935年に中国・北京の燕京大学客員教授に招聘され、敗戦後の51年に帰国、53年に死去した。

表1 鳥居龍蔵の海外調査

調査年度	調査地域
明治28年(1895)	遼東半島・満州(第1回)
明治29年(1896)	台湾(第1回)
明治30年(1897)	台湾(第2回)
明治31年(1898)	台湾(第3回)
明治32年(1899)	千島列島北部
明治33年(1900)	台湾(第4回)
明治35~36年 (1902~1903)	西南中国
明治38年(1905)	満州(第2回)
明治39年(1906)	蒙古(第1回)
明治40~41年 (1907~1908)	蒙古(第2回)
明治42年(1909)	満州(第3回)
明治43年(1910)	朝鮮半島(予備調査)
明治44年(1911)	朝鮮半島(第1回)・南樺太
大正元年(1912)	朝鮮半島(第2回)
大正2年(1913)	朝鮮半島(第3回)
大正3年(1914)	朝鮮半島(第4回)
大正4年(1915)	朝鮮半島(第5回)
大正5年(1916)	朝鮮半島(第6回)
大正8年(1919)	東部シベリア(第1回)
大正10年(1921)	東部シベリア(第2回)・北樺太
昭和元年(1926)	山東省
昭和2年(1927)	満州(第4回)
昭和3年(1928)	東部シベリア(第3回)・満州(第5回)
昭和5年(1930)	蒙古(第3回)
昭和6年(1931)	満州(第6回)
昭和7年(1932)	満州(第7回)・朝鮮半島(第7回)
昭和8年(1933)	蒙古(第4回)・満州(第8回)
昭和10年(1935)	満州(第9回)
昭和12年(1937)	ブラジル・ペルー・ボリビア
昭和13年(1938)	華北
昭和15~16年 (1940~1941)	中国各地

出所 [田畑1997] 4頁

鳥居は師である坪井とともに草創期の日本人類学の発展を支え、学会を牽引する役割を果たした。この間、台湾、北千島、樺太、蒙古、満州、東シベリア、朝鮮、中国西南部など東アジア各地へ調査に赴き（表1参照）、膨大なフィールドノートを残している。これら多くの地は当時の日本が帝国主義的拡張によって獲得した領土と重なっており、新聞や雑誌などメディアはこぞって鳥居の動向や調査内容を紹介した。また交通や通信手段の発達していない当時、重い調査用機材を携えての移動や、現地での調査は困難を極めることとなった。こうした事情により、彼は当代を代表する研究者としてだけでなく、子どもたちからも憧れの探検家としてその名を知られるほどに、抜群の知名度をもつ知識人として活躍することになる〔末成 1988〕〔中園 1995〕〔田畑 1997〕。

今日においても、鳥居は東アジア人類学の先駆者として記憶されている。一方、その学問を丹念に振り返れば、彼は海外の諸地域を自身の中心的なフィールドに据える以前、また、これらの調査に乗り出してからは帰国の合間を縫って、国内各地での調査を実施している。だが衆目の集まりやすい海外調査とは対照的に、彼の国内調査については、近年ようやくその像が明らかにされ始めたところである<sup>2)</sup>。

19世紀末から20世紀初頭にかけて、鳥居は精力的に被差別部落民の人類学的調査を行っている。彼の部落調査は新聞紙上で大きく取り上げられ、多方面で反響を呼んだ。全国水平社が結成され、部落問題が盛んに新聞紙上で取り上げられるようになる1920年代前半には、「穢多研究者として名高い」知識人としてコメントを求められるなど〔『読売新聞』1922・10・23〕、当該分野の専門家と目される存在でもあった。実際、全国水平社の活動家たちも、日本社会にむかって自身のアイデンティティを主張するに当たり、鳥居の部落民理解を独自の観点から摂取している〔関口 2010〕。

本稿では、当該期の日本社会に少なからず影響を及ぼしたと考えられる、鳥居の人類学的な部落民研究をとりあげ、当該期の学問状況および鳥居自身の学説のなかに位置づけつつ、その部落問題理解の特徴を探ることとする。

なお本文中において、当該期の学問や社会の状況を伝える目的から、今日では差別的なニュアンスをもつ呼称や地名を用いた箇所があること、また存在自体が科学的に検証されたわけではない「人種」集団についても、歴史的用語として用いた箇所があることを断っておく。

## 2 鳥居の部落調査と日本人種論

日本における人類学の歩みは、1884（明治17）年に坪井正五郎らを中心に東京人類学会が創立されたことに始まる<sup>3)</sup>。同会は、会員の調査報告や石器や土器を持ち寄って見せ合うといった活動から出発した。当初、その関心は多分に考古学的な内容に置かれていた。だが次第に各地の言語や風俗習慣などを扱う文化人類学や、人骨や生体計測にもとづく形質人類学へとその関心は広がりを見せる。また明治期の人類学においては、後述するようにコロボックル論争と呼ばれる日本の先住民論争が繰り返されていた。これらの過程をつうじて、日本列島への人類移動の経緯や日本人の起源への関心が高まり、人類学の学問的ビジョンや性格が明確になっていく〔寺田1975〕〔工藤1979〕。

こうしたなかで1885年、東京人類学会の会員であった箕作源八は被差別部落民が差別される理由に関して外国人説と職業説をあげ、これについて会員の意見を募ると同時に、「穢多ノ風俗」について各地の報告を求めた〔『東京人類学会雑誌』第6号、以下では『東人誌』6と略記する〕。これに応じて各地からの被差別部落民にかんする伝承や関係文献の紹介がなされている。その多くは、被差別部落民を日本人とは異なる「人種」として捉え、その起源について論じるものであった〔坂野2005〕〔黒川2010〕。

鳥居が被差別部落民の研究に関心を抱いた理由については、はっきりしたことは分からない。しかしその背景には、箕作の呼びかけによって会員間に喚起された部落問題にたいする関心があったとみて間違いない。実際、鳥居が上京前の1888年に郷里で組織した徳島人類学材料取調仲間の例会活動において、会員らによって県内の被差別部落民の起源にかんする考察や、その風習にかんする報告が行われている<sup>4)</sup>。その中には、後に鳥居が生体計測を実施することとなる県内の被差別部落にかんする報告も含まれており、鳥居の調査研究もこうした動向のなかから生まれたものといえよう。

さて、鳥居が行った被差別部落の調査は、現在までに判明している限りでは5回に及び、実施時期および場所はそれぞれ①埼玉県北足立郡新郷村（1893年）、②徳島県名東郡新居村（1897年）、③兵庫県飾磨郡花田村（1898年）、④徳島県勝浦郡小松島村（1900年）、⑤栃木県河内郡富屋村（1901年）である<sup>5)・6)</sup>。

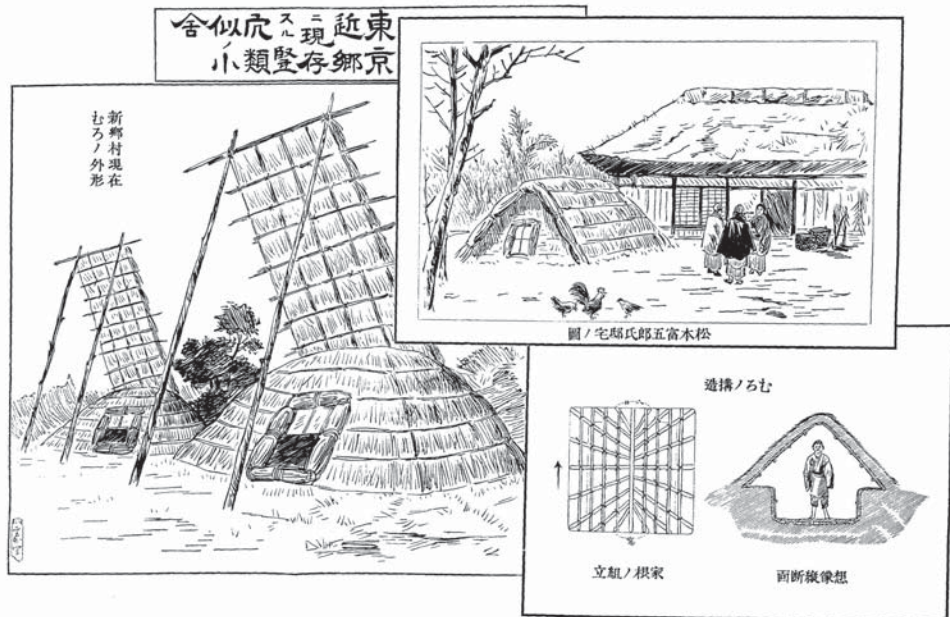
現時点で明らかにしえたこれらの調査について、その概要と特徴について以下に述べる。

## ① 埼玉県北足立郡新郷村

鳥居が初めて被差別部落の調査を行ったことを確認できるのは、1893年12月に大野延太郎とともに赴いた同村M地区である。同部落で鳥居と大野が調査したのは、「むろや」と呼ばれる「掘タテ小舎」についてである。「むろや」は同地区の家屋にほぼ一軒に一つずつ設けられている小屋で、四角形の穴を一尺四五寸から二尺四五寸くらいの深さまで掘り、その上に藁や蓆を敷いたものである。穴の内部は四方の土壁に蓆を張り、竹木で固定する。さらに木で三角の屋根を組んで藁を葺き、この屋根に地上からの出入りを設け、梯子をかけて室内に入る構造となっている（図1）。報告では、古来「むろ」と呼ばれてきたこの小舎を、同地の住民は冬期に寒さを防ぎ、竹細工をする作業場として利用してきたことを、スケッチとともに紹介している〔大野・鳥居1894〕。

この「むろや」について、内部は人間が自由に直立しうるほどの高さが確保されていること、なかには一間半四方ほどの広さを備えるものもあり、夜具を置く家もあることなどから、夜間に人が休憩することも可能とする。そこから鳥居と大野は想像を膨らませ、現在は作業場所として用いているものの、古くはこの小屋で人々が生活していたのだらうと推測している<sup>7)</sup>。さらに「むろや」について同地の人に問うたところ、近隣の「旧穢

図1 「東京近郷ニ現存スル竪穴類似ノ小舎」



〔大野・鳥居1894〕より

多村」でも同様の小屋を作っていることを聞きだしている。そのなかで鳥居らは「むろや」が「室」のことであると推測し、さらにやや唐突に「極北地方ニ行ハル、堅穴ト称スルモノニ近キガ如」と、北方民族の文化との関連を示唆する。

この強引にも思える行論からは、同地区の習俗と「極北地方」の堅穴式住居に共通性を見出し、部落民の起源を北方民族に求めようとする思考が垣間見える。ここに見え隠れしているのは、当該期の人類学界でさかんに意見が闘わされたコロボックル論争の影である。当時、坪井正五郎は日本の石器時代人について、彼らが堅穴に住み土器や石器を用いるなど、アイヌとは異なる習俗をもったことに注目し、北方のエスキモーと同系統の人種であるとした。そして、アイヌの伝承にあるコロボックルがこれに当たり、彼らが日本の先住民であると唱えた。これに対し、小金井良精は解剖学的にアイヌの体格は当時の人骨と似ているとし、日本の先住民はアイヌであり、石器時代の遺跡は彼らがかつて穴居していたことを示すものと唱え、鋭く対立した〔寺田1975〕〔工藤1979〕。

同論争はその後、小金井の唱えるアイヌ説が優勢となり、後に鳥居や大野もこれを主張するに至る。しかし同調査に赴いた当時、彼らは師である坪井の説を支持していた。こうした経緯を踏まえれば、鳥居らはコロボックルの存在を裏付ける材料として、被差別部落民の生活に北方民族の習俗を見出そうとしていたものと推測しうる。

実際、報告によれば、同調査は、東京人類学会の会員・阿部正功が坪井に「むろや」について語ったことがきっかけとなり、坪井が「人類学上頗ル面白キヲ感ジ」、鳥居らに赴かせて実施させたものであった。じつはこれに先駆けて、坪井は1886年に栃木県の被差別部落を訪れ、「むろや」と同様に庭に穴を掘り、藁葺き屋根を付けた小屋について調査している。この際、坪井は、同施設において人びとが革細工や草履作りの作業を行うこと、現在では少なくなっているものの、かつて雪駄作りが盛んだった頃にはこうした小屋が多数存在したことなどを聞き出したと報告している〔坪井1886〕。

明確に述べてはいないものの、このとき坪井が被差別部落民にむけた〈眼差し〉には、日本先住民であるコロボックルの末裔の姿が投影されていたと見ることも強ち無理ではないように思われる。鳥居らに「むろや」調査を命じたのも、自身の先行調査をさらに掘り下げ、その学説を補強する材料を探す目的があったと考えられないだろうか。いずれにせよ、鳥居らによる調査そのものが、当時の人類学界の論争との関連で実施されたこと、そこから被差別部落民のルーツが北方民族に求められたことは間違いなさそうである。

そして同調査において示された見解は、後に坪井や鳥居とも学問的親交のあった民間史家・菊池山哉へと引き継がれることとなる。菊池は1923年の『穢多族に関する研究』

で先住民起源説を説き、発禁処分を受けたことで知られる〔前田 2004〕〔礪川 2006〕。同書において菊池は被差別部落民を北方のウィルタ族と同系統の人種とし、彼らこそ先住民論争におけるコロボックルの末裔であると唱えている。その際、菊池が根拠の一つとしてあげたのも、各地の被差別部落のフィールドワークで見聞した「室」である。菊池はこれを先住民であるウィルタ族の竪穴式住居と同様の習俗とみなし、同族が北方に追われた後も内地にとどまった被差別部落民が今日に受け継いだものとしたのである。菊池はかつて坪井や鳥居、大野らが唱えた説をさらに発展させることにより、「異端の学説」を打ち立てたのだといえよう。

ただし、鳥居の部落調査はこれ以後、形質人類学的な手法へと重心を移し、また被差別部落民の理解についても大きく変容していくことになる。

## ② 徳島県名東郡新居村

次に鳥居が被差別部落民を調査したのは、郷里の徳島においてである。1897年9月、鳥居は自身が組織した四国人類学会の会員とともに、新居村に赴いている。同村T地区での調査における鳥居の関心は、①にみた被差別部落民の習俗にではなく、その身体に向けられた。鳥居によれば、当初、生体計測という試みについては当事者に嫌忌されるのでは、と心配したという。しかし意外にも住民は「毫も嫌色を表はさざるのみか寧ろ喜び進んで之に応ずる有様」だったと述べている〔『徳島日日新聞』1897・9・21〕。

日本人に対する生体計測は、1883年にドイツ人医師・ベルツが発表した研究〔ベルツ 1973〕が最初とされ、彼の論文は後に形質人類学への道を開くことになる小金井良清らを発奮させるきっかけとなった〔工藤 1979〕。当時、身体計測は、西欧の学問の中で盛んに行われていた。とくにフランスのポール・ブロカによって率いられた「パリ人類学」派は、頭蓋計測学をもちいた人種分類にもとづき、人種研究を推し進めたことで知られる。彼らは黒い皮膚、縮毛、顎の突き出した顔、長い頭などは劣等人種の特徴とする認識を共有し、肌の色や頭形にあらわれる人種差や男女差を、知的能力の差とみなした。これらは今日の視点からみれば、科学的な人種差別主義、性差別主義とみなしうる内容であった。〔グールド 1998〕〔竹沢 2001〕。

この時期以後、鳥居は各地でこの手法を用いた調査研究を行うことになる<sup>8)</sup>。当該期の日本の学問は西洋起源の方法論の摂取に懸命になっていた。鳥居の学問にもこうした時代的制約が影を落としていたことは否定できない。

鳥居がとくに関心を向けたのは人びとの脳頭蓋の形質であり、それを評価するため頭

示数 (cephalic index, 頭長幅示数ともいう) の算出に熱中している。頭示数とは、人体頭部の前後の最大長と左右の最大幅を計測し、頭最大長/頭最大幅×100によって算出した指数である<sup>9)</sup>。当時の西洋において人種分類の指標として盛んに用いられた概念で、鳥居の試みは日本の人類学者としては最初期のものであった。彼が人種起源を探る方法として採用したこの手法は、後の形質人類学における主潮流となっていく。

さて同地区の調査報告について見ておきたい。鳥居は同所10名への身体計測によって得られた被差別部落民の特徴を、「頭の形の幅広ならざる事、眼の蒙古的ならざる事、頬骨の突起せる事、顔の長き者の希なる事、鼻のトビナルド<sup>10)</sup>表中の第一(側面より見たる時湾曲無きもの)多き事、髪の毛の生え際の好く揃ひたる事、髭髯と脚毛と少しく有るのみにて他には体毛と称すべきもの存せざる事」と報告している<sup>11)</sup>。また鳥居が強調したのは「蒙古眼<sup>12)</sup>」の特徴が見られないことで、これは多数の地元小学校の生徒についても同様であったことを指摘している。さらに頭示数の平均が75と「頭の幅狭隘なること」に言及し、これが「所謂マレイ諸島ポリネリヤン島の土人即ちマレヨポリネリアン種族に類似せるを発見せり」と述べている [鳥居 1897]。

この結果を受け、鳥居は部落民について「朝鮮人の帰化せし者なりとの説は少しも信ずるに足らざるなり。蓋し一も其帰化らしき体質を認めざればなり。若しも彼等が朝鮮的体質なるならば彼等の目は必ず蒙古的ならざるべからず。亦頭形がブラキセフワリック即ち幅の広きものならざるべからず。然るに彼に在りては此要素を少しも認むる能はざるに於ては寧ろマレー的体質を備ふるものに類似せるなり」と述べ、朝鮮半島からの帰化人とみなす認識を批判する。

また鳥居は、先述したベルツの説を引き、日本人種が蒙古人種、マレー人種の二系統からなるとする見解を紹介した上で<sup>13)</sup>、このうち被差別部落民が後者の体質を備えている、と述べる。よって「穢多なる者は普通人中の或る形式に類似せる者にして、決して普通人に見ざるが如き特別なる形式を具へたるものには無之候」と結論づけている。

ただし、これをもって鳥居がかつて①で示唆していたように被差別部落民を先住民とみなす理解の否定に転じたかといえ、ことはそう単純ではない。後でみるように、大正期に有力となる鳥居の固有日本人説が登場する中で、彼の被差別部落民への理解はさらに変容を遂げてゆくことになる。ここでは鳥居が、当該期の学術動向に基づいて日本人と部落民の人種関係を究明しようとしていたことを確認しておきたい。



### ③ 兵庫県飾磨郡花田村

1898年2月、鳥居は台湾調査から帰京途中、兵庫県に立ち寄り、中国人類学会の会員らと共に飾磨郡花田村へ調査に赴いている。同所T地区で20歳～49歳の8名の計測を行ったところ、頭示数の平均が76.87であった。調査の助手を務めた人物は、頬骨、眼、髯などの形質において②の徳島県名東郡における調査とほぼ同様にマレー形式の身体的特徴が発見されたと語っている〔『神戸又新日報』1896・2・16〕。

ちなみに同年10月、坪井正五郎は東京人類学会の年次大会において「実に最近一年間に我々の得たる著しい新知識」として「特に諸君のご注意を乞ふ価値が有る」業績の筆頭に、鳥居の「穢多の人類学的調査」を挙げている〔坪井1898〕。前年来の生体計測調査に対し、学会からは、高い評価が与えられ、注目が寄せられていたことが分かる。

### ④ 徳島県勝浦郡小松島村

1900年12月、鳥居は東京帝大の命を受けて、勝浦郡小松島村に出張し、同所N地区にて調査を行っている〔『東人誌』177〕。同所で14歳～38歳の10名の計測を実施した結果、頭示数の平均は74.48であった。これを受けて、東京人類学会の例会にて「穢多の調査」と題する報告を行っている〔『東人誌』178〕。

### ⑤ 栃木県宇都宮市宇都宮監獄および河内郡富屋村

1901年3月、鳥居は東京帝大の命により、部落調査のため栃木県に出張している<sup>14)</sup>。まず、宇都宮監獄にて28歳～36歳の収監中の被差別部落民3名について計測を実施している。これに続き、河内郡豊郷村S地区で調査を試みたが、同所では住民の協力を得られなかった。そこで河内郡富屋村の被差別部落に移り、調査依頼をしたところ、受諾された。同村では17歳～38歳の9名を計測している。また同所では、土俗口碑の採集も行っている。その後、一、二の被差別部落を見て回り、帰京している。帰京後の4月、鳥居は同調査を踏まえて東京人類学会の例会で「穢多の昔話」と題する報告を行っている<sup>15)</sup>〔『東人誌』181〕。

この栃木県での調査で身体計測した12名の頭示数の平均は、79.44であった。この結果について、鳥居は次のように述べている。徳島、兵庫で身体計測した際はほとんど長頭、中頭であったが、栃木では長頭、広頭のものが混じていた。これは埼玉県児玉郡付近で調査した際の被差別部落民の頭形と同じであった。そこから「未だ断言は出来がたきも、若しも旧穢多なるものをして、其タイプを仮りに四国、中国辺の彼等の頭形、長頭ものと

して見れば、関東の穢多は或は純粹のものにあらざるが如し。しかし関東の穢多中、面白きは長頭の特徴を有するもの、存在する事実なり」とする。

この報告は、鳥居が自説とは矛盾する結果が現れた際、これとどう向き合ったかを示唆している。鳥居の解釈によれば、被差別部落民の「純粹」な形質は、徳島、兵庫の長頭の型に求められる。これに対し、関東近辺の部落民については、交雑により過去の遺伝形質が失われつつある、とする。このように彼は、外見的には調査結果の数値を尊重しつつも、実際はかなり強引な結論を導き出している。鳥居は世俗的な権威や固定観念に囚われず、学問的真理を探求する学究肌だった。この場合も、必要があればそれまでの仮説に修正を施すことも厭わなかった。その一方で自説に固執し、これに合致する要素のみに注目し、結論を補強する側面を持ち合わせてもいた。こうして、次第に鳥居のなかの部落民理解は明瞭になっていったと考えられる。

### 3 固有日本人説への道 — 参照項としての部落民 —

鳥居は1900年代以後、国内外の各地住民の身体計測や考古学的調査を活発に行い、その成果を発表していく。そしてさらに日本列島への人種の移動や日本人種の形成過程の究明に向かい、1910年代には固有日本人説を唱えることとなる。ここでは、前節で検討した部落調査が、この過程とどのように関わっていたかを考察する。

1904年秋、鳥居は岐阜・石川両県の山岳地域を中心に住民の身体計測を行っている。この際、彼は同調査の意義をそれまでの部落民調査と関連づけながら次のように言及している [鳥居 1905]。

是より前に私は日本の穢多のフキヂカルキャラクターを調べて測定観察を致しましたが、未だ日本人の調べが付かぬのでありますから真価が分らぬ、然るに今回飛騨の各所を歩きまして斯ふ云ふ調アツが各所で出来ました。若し此調が各所より集ると穢多の調べも自ら出来やうと考へます。

このように鳥居は各地で実施した住民調査を、被差別部落民の調査を補完するものとして位置づけていたことが見て取れる。実際、各地での身体計測結果の考察において、しばしば被差別部落民との比較が行われている。

例えば、1901年、伊豆諸島の御蔵島から東京に出て生活する20歳以上の男子6名を計

測したところ、頭示数は全て80以上（平均82.15）の広頭であったという。伊豆諸島は他と地理的に離れていることから、古い昔の風俗、習慣が残っており、同様に身体形質も他と「混化」していないはず、とする。調査の結果は、「彼等は明かに蒙古種族のタイプを有する」とし、これは初島で観察した時と同一であったという。そして徳島や兵庫の「穢多の長頭と比せば、最長広頭指示数上、二者は大に異なれりと云ふべし」と結論している〔『東人誌』181〕。

因みに当該期に鳥居は沖縄にも赴き、住民の身体計測や遺物の調査を行っている。この際、鳥居は沖縄における石器時代の遺物に、アイヌや台湾の「生蕃」との関連を示す特徴を見出している。しかし彼はこれを沖縄における先住民のものとし、現在の沖縄住民とは異質なものとして退けている。そして頭形や肌の色などから「琉球人」が蒙古系人種に外ならず、日本人と同系統であると断定している〔富山2002〕。後に「日琉同祖論」を展開する伊波普猷は、このとき鳥居に同行し、調査の助手的役割を果たしている。「沖縄学の父」と称される伊波にとって、同調査は伊波がその学説の体系化に向かう契機となったことでも知られている〔中園1995〕。

比較研究の考察対象は国内の住民に限られていたわけではない。鳥居は朝鮮半島の住民と被差別部落民の比較を行い、1905年1月には「旧穢多の頭形と朝鮮人の頭形との比較」と題する発表を行っている。報告によると、「シヤンツル及プルダレ両氏の研究に基づく百十三人の朝鮮人の最大広頭指示数を土台として、此れに同君〔鳥居——筆者註。以下、同じ〕が徳島地方、姫路地方、宇都宮地方にて旧穢多を測定して得られた指示数を比較せられ、前者は其の指示数八三、六で広頭なるにも関はず、後者は概ね長頭乃至垂長頭である所から考ふると、往々世人が言ふが如く旧穢多は朝鮮人の帰化したものなどではあるまいと考へられる」と述べている〔『東人誌』226〕。

また1910年代に入り朝鮮半島の調査に従事し始めると、鳥居は朝鮮の被差別民である白丁にも関心を向けていく。彼が調査先から学会誌に送った通信記事には、「私〔鳥居〕は彼等に就て鮮人測定中に、最も注意しまして種々の写真を撮影したり、又種々の材料も有って居りますが、是等は追って発表するといたしましやう」と記している〔『人類学雑誌』38-6, 1923, 以下では『人誌』と略記する〕。彼は朝鮮の白丁が城外に一部落を形成していることについて、「日本の穢多と同一境遇」だとする〔『東人誌』29-2, 1914〕。また白丁の身体形質についても、日本における被差別部落民と同系統に属するという仮説のもとに調査を進めたことが窺われる。例えば中清南道での調査では「日本の旧穢多との比較は他道よりもよく似た所があります。是等は馬韓、百濟、其他の関係にも及ぼし

て見たいと思ひます」と述べている〔『人誌』30-10, 1915〕。

このように離島や山間の僻地などの辺境地域、さらには植民地を含む東アジアにおける生体計測により、鳥居はしだいに日本人種を構成する主要な系統を蒙古人種に求める理解を發展させてゆく。また彼は同時期、満州や蒙古、朝鮮半島への調査に頻繁に出かけ、日本の弥生式遺物と大陸文化に深い繋がりがあったという考えを強くする。そして有史以前の日本には、縄文式土器を用いたアイヌとは別に、弥生式土器を用いた石器時代人が存在したこと、彼らは満州、朝鮮半島と文化的繋がりを有し、大陸から渡来したとする説へと發展させたのである〔工藤 1979〕〔アバ 2009〕。

このことは同時に鳥居のなかで、日本人種に占めるマレー人的要素の比重を小さくさせてゆくこととなった。彼がかつて日本人の生体計測研究の先駆者であり、その権威として参照してきたベルツの説によれば、蒙古人種とマレー人種のうち、「日本の王朝を日本人にもたらした」のは後者であり、また同人種は「日本人全体で占めるその割合がもっとも大きい」とされた〔ベルツ 1973〕。鳥居はこのベルツによって提示された日本人種起源論の枠組みを維持しつつも、国内外の多くのフィールド調査を経て、その内容を大きく書き換える方向へと向かったことになる。その過程で、(南方マレー系人種とされた)被差別部落民は参照項として、日本人ルーツを北方に求める論拠の一つとされたのである。

1918年、鳥居は『有史以前乃日本』を発表し、固有日本人説と呼ばれる日本人種論を展開した。同書において鳥居は、日本人の起源が南方ではなく北方にあり、彼らは石器時代にはすでに朝鮮半島を経由して日本列島に移住し、弥生式遺物を用いたとする説を強く打ち出す。ここで彼によって提示された新たな日本人種論は、大正期における代表的な学説として流布することとなる。

鳥居によれば、日本列島に最も早く移住してきたのはアイヌである。彼らは三千年以上前の石器時代に到来し、縄文式土器を使用したとされる。先に触れたように、かつて坪井正五郎は日本の先住民についてコロボックル説を唱え、鳥居もこれを支持していた。しかし同書ではアイヌこそが先住民であり、沖縄から青森、北海道に至るまで、さらには日本の領土以外にも広がっていたと述べ、これを明確に否定している。

アイヌに続いて、日本には1. 固有日本人、2. インドネジアン、3. インドシナ民族の三つの民族が到来し、これらが日本人種を形成することとなった。

まず、1. 固有日本人と呼ばれる集団が弥生式の文物を携え、大陸方面から朝鮮半島を経由して日本に渡来した。鳥居によれば、この人びとが日本人種の主要部分をなす。固有日本人とは蒙古系の人種に属し、解剖学的には広頭で、蒙古眼の形質的特徴を有する。

彼らは記紀神話に現れる国津神系の民族にあたり、石器時代にすでに到来し、弥生式土器を使用したとする。また後に固有日本人と同系統の蒙古系人種が金属器使用の時代にも北方から渡来し、古墳を残したとする。古事記や日本紀に記されているのはこの出来事であるとする。

これに続いて日本に到来し、日本人種を形成しているのが、2. インドネジアンと呼ばれる人びとで、彼らは南方の馬來（マレー）人種である。彼らが日本列島に到来したのは固有日本人よりも後で、最初、九州の一地方に勢力を築いた。古代史に登場する隼人はこのインドネシアの風習に似ているという。また彼らは人数が少なく、丸木船に乗って移住して来たものもあるが、黒潮や風に流されて偶然来たものもあっただろうとする。

最後に到来したのが3. インドシナ民族であり、これは中国南部における漢民族侵入前の先住民で、かつて鳥居が調査した苗族系統に属する。苗族が用いる銅鼓は日本で発掘される銅鐸の意匠、模様、風俗と類似しており、銅鐸は彼らが用いたと推論している。

ここで鳥居の部落調査との関わりから注目したいのは、彼が自身の日本人種形成論のなかでインドネシアと呼んだ人種である。既に見てきたように、鳥居は部落民調査において繰り返し彼らがマレー人種であり、大陸渡来の蒙古系人種とは異なることを述べていた。同書のなかで明言していないものの、彼の調査研究の歩みを踏まえるなら、この箇所は被差別部落民を念頭において述べたと考えてよい。

彼によれば、日本に到来したインドネシアとは、「極めて原始的の馬來で、文化の程度低く、風俗の如きも男は腰に褌、女は腰巻を纏ひ、首、手などには輪を入れ、腰には刀を提げ、足は跣足であって、今日尚盛んに首狩の蛮劇を演じて居る。日本人に縮れ毛の者が見られるのは、このインドネシアがかつて馬來諸島に居住していた「ネグリト一種族」を征服し、これと混血した者が到来したからであろうと推論している。また「固有日本人とインドネシアとが日本人として交雑し、雑種型を形成し、尚或地方では固有型の其の群を諸所に遺して居るのである」とする [鳥居 1918]。

こうした記述からは、鳥居もまた人種や民族の間に優劣があるという認識を受け入れていたことが分かる。そしてマレー人種である被差別部落民については、蒙古系人種である日本人の主要部分よりも劣った存在としてみていた可能性も否定できない。

#### 4 鳥居の被差別部落民理解について

次に、鳥居の部落民理解の特徴を、これまでも見てきた彼の学問との関わりを念頭

に置きながら考察する。

鳥居の部落民調査の多くは、同時期の台湾調査と平行して行われた。彼は1896年から1900年にかけ、台湾において計4回、延べ日数500日以上というフィールドワークを行っている（前掲表1参照）。この長期にわたる海外調査とほぼ同時期に、第2節の②～⑤の調査が実施されている。

鳥居は台湾調査において、現住民を「生蕃」と呼び、彼らを「マレー種族」あるいは「原マレー」として位置づけた。そして「生蕃」と諸民族との比較研究により、彼らの人種的・文化的連関、および台湾先住民の台湾への往來の経路や時期について明らかにしようとした〔松澤1993〕。既にみてきたように、鳥居は②以後の調査で被差別部落民をマレー系人種とみなした。これは被差別部落民と台湾の「生蕃」を同系統の人種とみなすことであり、実際、③の兵庫調査においては部落民の形質を台湾東部の「紅頭嶼土人と同じ」と述べている〔『神戸又新日報』1898・2・16〕。これらを総合して考えるならば、鳥居の部落民調査と台湾の「生蕃」調査は一連の研究であったことが分かる。つまり、南方～台湾～日本（白丁もこれに含めるならば、～朝鮮半島）にまたがるマレー人種の分布のなかに被差別部落民を位置づけていたのである。

また同時に、彼は被差別部落民の研究を、日本人種形成論という彼の学問的関心のなかで理解しようとしていた。ただし、被差別部落民を日本人種のおくまで周縁部に位置するものとし、中心的な存在とみなすことはなかった。①と②の調査の間では、部落民理解について北方民族から南方マレー人種へと大きく視点の移動が生じているものの、一貫して日本人とその外部の間に位置するマージナルな集団という理解が堅持されているといえよう。とくに彼の固有日本人説は、蒙古系を中心とみなし、マレー系を少数派と捉えている。彼が日本の形質人類学の嚆矢として評価していたベルツが、日本人には蒙古系よりもマレー系の体質が最も多く見られると主張したことと比較すれば、彼の説はこれと対称的な内容だったともいえよう。

鳥居が被差別部落民に注ぐ眼差しには、一貫した特徴を確認することができる。彼によれば、被差別部落民は、先史時代の日本人種の成立過程と関わりを有する一方、現在にまで固有な文化や遺伝形質を伝える人種集団である。例えば⑤の調査にみたように、彼は徳島や兵庫での調査から得られたマレー人種としての特徴を示す「長頭」を、あくまでも部落民に固有な遺伝形質と考えた<sup>16)</sup>。これに対し、栃木や埼玉で得た「亜長頭」という結果については「関東の穢多は或は純粹のものにあらざるが如し」と、歴史的な時間経過のなか、交雑によってその固有な形質が消失したものと捉えている。晩年に至るまで、

彼がこうした理解の有効性を疑った形跡は見られない<sup>17)</sup>。

さらに言えば、彼の被差別部落民と日本人への〈眼差し〉には大きな違いが存在していた。例えば、②における徳島での部落民調査に際し、これが日本人種の成立を解き明かす鍵となる可能性に言及し、次のように述べている〔鳥居 1897〕。

今後 T の如き形式より形成せられ居る団体の中へ普通人雑婚する様に相成候へば追々は蒙古形式の者も生ずるに至るべしと相考へ申し候。斯かる雑婚より起る子供に関する研究は啻に穢多の取調べとして面白きのみならず、日本人種形成の原因を試験的に研究するに近かるべきか。小生は将来斯かる研究が盛んに行はれて従来解すべからざる事となし居たる事実の解釈さるゝに至る事を切に希望致居候。

彼は、マレー人種である被差別部落民と蒙古系の人との交雑によって生まれる子どもの研究をつうじて、日本人種が形成された際の様子を再現しようという<sup>18)</sup>。ここで留意すべきは、日本人種については誕生いらい進化を遂げ、原初の状態は「解すべからざる事」となっていると考えているのに対し、被差別部落民は未だに祖先の状態に止まっていると彼が理解していたと解釈し得る点についてである。これは 19 世紀末の欧米の学問のなかで、広く流布していた「反復説」と呼ばれる理解のバリエーションと考えられる。「反復説」とは、劣った集団の人びとが、進化を遂げた優れた人種集団の祖先の段階にはまり込み、反復状態から抜け出さないでいるとする主張のことである<sup>19)</sup>。

では、鳥居は被差別部落民に固有な遺伝形質をどのようなものと捉えていたのだろうか。この点で注目されるのは、⑤の宇都宮監獄で実施した部落出身の囚人の生体計測である。鳥居はこの調査について、「この罪人の体格はたゞに人類学のみにとゞまらず、刑事人類学の材料としても面白かる可し」と述べている〔『東人誌』181〕。ここで鳥居があげた刑事人類学とは、イタリアのチェザレー・ロンブローゾとその学派が提唱した犯罪人類学、生来性犯罪人学説とも呼ばれる学説である<sup>20)</sup>。この学派によれば犯罪者とは、人類が未だ進化を遂げておらず、遅れた状態にあった時代の祖先の形質が、「隔世遺伝」によって現代に現れたものに外ならない。犯罪者には生来の身体的、精神的な遺伝が存在するのだというその主張は、当時の西洋社会に大きな波紋を投げかけた。

鳥居の師である坪井正五郎は、いち早くこの学説を日本に紹介した中で次のように説明している。進歩した社会では非社会的とみなされ、犯罪となる行為が、進歩の遅れた社会では非社会的とはみなされず、平気で行われることがある。例えば、前者の社会では子

どもの間引きは残酷な行為として罪とみなされるが、後者では食物の欠乏ゆえに平気で行われ、罪とみなされない。しかし進歩した社会においても、昔は平気であった旧態の行為が、身体的、心理的遺伝を介して再発することが考えられる。そこで刑事人類学は、「罪人に就て其体格精神を調査し、是等の諸点に於て身体の上、心の上の旧態再発の形跡があるかどうかを見る」ものである。「刑事人類学の真価」はこうした「旧態再発の形跡があるかどうか、夫に従って心の旧態再発があるか又野蛮人と同じ心を有した者が生れ出て知らず識らず当り前の事と思って非社会的の行ひをする様の事は無いかと云ふ事を調べる」ことにある〔坪井1893〕。

犯罪人類学は、社会進化論や優生学を背景とした人種科学であり、「原始人」や下等動物のもつ残忍な本能が「先祖返り」をした犯罪者に再現されるとみた。例えばロンブローゾは、犯罪者が刺青を入れるのは「痛みの感覚がないこと、装飾を好む」特徴の現れであり、これらを犯罪者における「先祖返りを反映したもの」とした〔ゲールド1998〕。また犯罪者が隔世遺伝によって現代によみがえった「原始人」であるとするならば、進化から取り残された存在と見なされる現代の「未開人」たちは、必然的に「犯罪種族」とみなされることになる。

鳥居が自身の部落民調査をどのような構想のもとに行っていたかについては、先述した以上の論はない。しかし実際、同調査では鳥居も囚人の腕に彫られた刺青をスケッチするなど、これを身体的、精神的な遺伝形質と捉えた節も見て取れる。彼が被差別部落民に注ぐ〈眼差し〉にも、当時のアカデミズムに色濃く浸透していた科学的な人種主義の側面が見え隠れしているといえよう。

## 5 鳥居龍蔵の部落民調査とその社会的反響

鳥居の部落民調査については、被差別部落民にまつわる異民族起源説を否定する内容であったとして、しばしば積極的に評価されることがある<sup>21)</sup>。では、鳥居自身は日本人と被差別部落民の関係をどのように述べていたのか。また、報道を通じて社会はこれをどのように受け止めたのか。最後に、彼の学問的理解の内実と彼の学問に対する社会的反響について考察する。

②の徳島調査において、鳥居は部落民について「朝鮮人の帰化せし者なりとの説は少しも信ずるに足らざるなり」「決して普通人に見ざるが如き特別な形式を具へたるものものには無之候」と結論づけている。また③の兵庫調査では「我々の内に雑種（ベルツ氏も



蒙古形式とマレー形式とありと云へり)のもの多くして反って彼等種族こそ単純なる人種ならぬ、何の恥る事かあらん、彼ら幾百年の後は普通人との雑婚より遂に蒙古形式の者も生ずるに至るべし」と、日本人種中に被差別部落民と同じマレー形式が見出されることを強調している〔『神戸又新日報』1898・2・16〕。これらを踏まえれば、たしかに鳥居は「日本人と人種が異なる」という被差別部落民への差別言説を批判する視座を打ち出しているともみることができる。

しかしこのように「朝鮮半島からの帰化人説」を否定した点ばかりにとらわれていては、彼の部落民調査の意味を読み違えることになりかねない。なぜなら、鳥居が日本人種の主要な部分とみなしたのはマレー人種ではなく、蒙古人種の固有日本人であったからである。また先に述べたように、鳥居は被差別部落民と同時期に調査した台湾住民について、同じくマレー人種であると唱えた。彼は、日本人とこの台湾原住民の人種的關係については、「台湾本来の土人は日本人と同種族にあらざるが如し」と、両者が異質であることを強調している〔『読売新聞』1897・1・27〕。実際、台湾調査は鳥居が日本人起源を北方に求め、固有日本人説へと向かう契機であったことが指摘されている〔アバ2010〕。

こうした鳥居の説明には相矛盾する側面が見え隠れしていることが分かる。同じくマレー人種であっても、被差別部落民については日本人と同系統であると述べ、台湾の「生蕃」については日本人とは人種が異なるという。こうした言説は、被差別部落民の祖先であるマレー人種が日本人種の中心的な因子ではないとする理解を、当初から強く持っていたことを窺わせる。このときすでに鳥居の中では日本人種の中核部分を北方系の蒙古人種に求める理解の図式が立ち現れていたのではないだろうか。その後の固有日本人説への展開はその実証にむけた努力だったかのようにも推測できる。

しかし、鳥居の真意がどうであれ、彼の部落民調査の言説は異民族起源説として理解され、流通するケースも珍しくはなかった。

例えば、先に触れた菊池山哉は、被差別部落民が日本人種とは相異なる先住民であると唱えるなかで、『東人誌』に掲載された鳥居の部落調査の報告記事を引用し、異民族起源説が学問の世界では決して異端の説ではないことを述べている〔礫川2006〕。

このことは、鳥居の調査を報じた新聞記事を見れば、いっそう鮮明になる。鳥居の部落調査は、新聞メディアをつうじて広く社会に伝えられ、大きな反響を呼んだ。とりわけ1897年の徳島調査の際には「日本全国の新聞紙に其転載を見ざる所なき有様に御座候」と述べるほどの反響を呼び〔鳥居1897〕、実際に1898年の兵庫の調査と併せて、多くの新聞紙上で報じられたことを確認しうる。

その際、「之〔被差別部落民〕をマレー諸島，ポリネシヤン島の土人「マレヨポリネジアン」種族に比するに尤も酷似し，絶えて蒙古人種の形式ならず」〔『日出新聞』1898・2・17〕、「穢多はマレー人種なり」「朝鮮人の帰化したるにあらずして或はマレー人種の帰化したるものならん」〔『報知新聞』1897・9・23, 25〕など、やはりもともと存在した日本人種のもとへ、外部から「帰化」という外来性を強調する報道記事が目につく。かかる報道が、当時の日本人種論者が唱えた混合民族論の理解の上に立ってなされたとは考えにくい<sup>22)</sup>。多くの読者にとっても、日本人とは異質な存在としての被差別部落民のイメージを喚起する言説として受容され、流布したと推測される。

またこのように彼の調査が大きく報道されることにより、鳥居は当初、予期していなかった事態に直面した。被差別部落の当事者から調査にかんする抗議や問い合わせが寄せられたのである。鳥居によれば、ある被差別部落民からは彼の調査にかんする新聞報道について、「穢多という字を使ふのは怪しからんと凄じ詰問状」が届けられたという〔『読売新聞』1922・10・23〕。しかし鳥居がもっとも困惑したのは、被差別部落民の呼称への抗議に止まらず、調査の内容に踏み込んだ問い合わせが寄せられたことであつた。

例えば、和歌山県の融和運動家として知られる岡本弥は、1897年、東京人類学会の会員となり、上京のごとに坪井正五郎のもとを訪ね、歴史や民族についての教を乞うたという<sup>23)</sup>。そして鳥居の部落調査についても、1900年11月、調査資料の閲覧を願ひ出ている。これに対し、鳥居は「頬骨、天神髭、蒙古眼」などについて書状で回答したものの、資料開示には応じなかつたようである〔岡本1941〕。たとえ鳥居の中では学問的関心から行われた調査であつたとしても、岡本のように「我等は劣等民族ではない」と唱える当事者に対し、自説を述べることには躊躇う側面があつたと考えられる<sup>24)</sup>。

こうした経過をみても、鳥居の調査研究が被差別部落民にまつわる「帰化人説を否定する」ものとして受容されたとすることには無理があるように思われる。実際、管見の限りでは岡本からの照会が出された1900年以後、鳥居の調査は全く新聞報道されることがなかつた。推測ではあるが、こうした反響への対応の戸惑いから、鳥居がメディアへの情報提供に消極的になつたのではないだろうか。

## 6 おわりに

1920年代以後、鳥居の関心は固有日本人の起源とみなした満州や蒙古地方の調査研究に傾注する。部落調査についてはかつては情熱的に取り組み、マスコミ上でも著名となつ

たにも関わらず、中断し、封印してしまう。その理由については明確には分からないものの、本稿でもみたように調査対象である被差別部落民からの抗議のほか、全国水平社の活動が影響した可能性も考えられよう。

ただし彼の調査に過剰な人種主義的イデオロギーを読み込むことには、ひとまず慎重であるべきだろう。本稿でもみたように、彼の調査がまずはコロボックル論争や日本人種論など、当該期の学問的潮流に棹さして行われていたことに目を向ける必要がある。統計学的知見にもとづいて行われる今日の研究手法からすれば、鳥居の調査は標本数の少なさや標本抽出手法への疑念など、違和感を拭い去ることはできない。だが今日の尺度を過去に持ち込むことにさしたる意味はないであろう。

しかしその上でなお、同時に彼の学問が内包していた問題点についてもこれを正面から捉える必要があることはいうまでもない。彼の研究が同時代において少なからず社会的影響を持ったことに注目することは、やはり重要であろう。またそこに科学言説がもつ権力性を読み取ることはすぐれて現代的意味を持つはずである<sup>25)</sup>。

ともかく、ここではこうして20世紀初頭の日本のアカデミズムにおいて被差別部落民に対する研究者の〈眼差し〉が形成されつつあったことを確認しておきたい。そして鳥居によって提起された部落民理解が、続く時代にどのように継承され、あるいは変形され、受容されていったのか。この点については稿を改めて論じることにしたい。

#### 注

- 1) 本稿の範囲を超えてしまうものの、喜田と鳥居の学問は互いに影響を及ぼし合っていたことを確認する。部落史研究をめぐる両者の研究は深く交錯しており、この点について現在準備中の別稿で詳しく論じる予定である。
- 2) こうした状況に対し、近年、[田畑 2007]、[岡山 2010] などにより鳥居の国内調査についてもその内容が究明されつつある。これらが同時代の知識人および彼らの日本人論・日本文化論にいかなる影響を及ぼしたかについて、今後さらなる解明が待たれる。
- 3) 東京人類学会の成立に至る経緯や当時の活動内容については[寺田 1975]、[坂野 2005]などを参照。
- 4) 例えば1889年7月の第5回仲間談話会では、仲井伊與太「本邦古代人民の風習を述べ併せて穢多の起源に及ぶ」、大阪直吉「T村穢多の風習」と題する報告が行われている〔『徳島毎日新聞』1889・7・16〕。なお同組織は1891年に徳島人類学会、1896年に四国人類学会へと改称し、同地における東京人類学会の地方支部的性格をもちながら活動を展開していく。また、喜田貞吉も同会に入入りしており、四国人類学会の発会式では祝辞を述べている〔『徳島日日新聞』1896・7・19〕。

- 5) 地名については、調査当時のものを用いた。なお、以後の本文中における①～⑤の番号は、ここに列挙した調査と対応させて用いることを断っておく。
- 6) 他にも、鳥居は後年の回想のなかで武州、信州でも調査を実施したと述べている〔鳥居 1953〕。武州については、研究のなかで埼玉県「児玉郡児玉町付近」で実施したと記しているが〔『東人誌』181〕、実施時期については不明である。また鳥居は1900年代後半から1920年代半ばにかけて、長野県内で調査を行い、その成果を『諏訪市第一巻』（1924年）、『下伊那の先史及原始時代』（1924年）、『先史及原始時代の上伊那』（1926年）としてまとめている〔岡山 2010〕。信州では、これらの調査と併せて実施されたものと推測されるものの、現時点では明らかにできていない。
- 7) 1894年1月の東京人類学会の例会にて鳥居は「武蔵北足立郡前野宿穢多村穴居ノ状態」と題する報告をしている。ここからも「むろや」を「穴居」習俗の残存形態とみなしていたことが分かる〔『東人誌』9-94〕。
- 8) 徳島県立鳥居記念博物館には、同調査に際して作成された調査票が残されている。この調査票は頭形、頭毛、顔、目、鼻、皮膚の形状などを観察し、表裏一枚の測定紙に記入しようまとめたものである。鳥居の回想によれば、イギリス人類学会とドイツのシュミットが出版した二冊の「人体測定案内書」を基礎に、当時、東京帝大の助手であった足立文太郎と共同で制作したものである〔鳥居 1936〕。同博物館の方々には資料閲覧の便宜をいただいた。記して感謝の意を表したい。なお以下の鳥居の部落調査の記述における計測値については、同カードからの引用であることを断っておく。
- 9) 鳥居はフランスのデニケルが設定した分類を用いて、77以下を長頭、77から79.6を亜長頭、79.7から81.9までを中頭、82から83.2までを亜広頭、83.3から86.9までを広頭、87以上を過広頭と説明している〔鳥居 1905〕。上面観では、長頭は前後に長い長円形で左右の幅が狭くなり、広頭は左右に丸みを帯びて前後に短い頭形となる。
- 10) トピナールはプロカの第一の弟子であり、後継者として「パリ人類学」派を牽引した学者である〔ゲールド 1998〕。
- 11) このうち調査カードが残されているのは、31歳～53歳までの8名である。
- 12) 蒙古眼とは、目頭の部分を覆う上まぶたの襞（蒙古襞、あるいは蒙古皺襞ともいう）のある眼のことを指す。外見上、目頭が鋭くとがる特徴があり、「モンゴロイド」に多く見られる形質とされる。
- 13) ベルツは、日本人の系統と起源を三つの「人種的因子」に求め、次のように記している〔ベルツ 1973〕。「一、アイヌ 中部および北日本の原住民で、現在の日本人のなかで占める割合は少ない。二、蒙古系種族 中国、朝鮮の上流階級の人びとに似たタイプで、大陸から朝鮮を経由して本州の南西部に上陸し、次いで本州一円に広くひろがった。三、それとは別の、明らかにマレー人に似た蒙古系種族 最初、南日本すなわち九州に上陸し、次いで本州に渡り、次第に全国を征服していった。この種族は、今日なお薩摩一帯にもっとも純粋なかたちで残っており、日本の王朝を日本人にもたらした。日本人全体で占めるその比率はもっとも大きい」。ここでは後に、多くの日本人論者によってくり返し説かれることに

なる二つの人種起源（大陸系と南方系）が現れていることを指摘しうる。

- 14) 当初は福島県にも立ち寄る予定であったが、日程の都合からか実現していない。
- 15) 後の回想において鳥居は、被差別部落民の間では「桃太郎」「猿蟹合戦」の昔話の伝承がない、などの特徴があったと述べている [鳥居 1953]。
- 16) 声高に主張されることはなかったものの、日本でも盛んに行われた頭蓋計測調査のなかで、「広頭」は能力の優れた人種の身体形質であり、反対に「長頭」は劣った形質であるとの理解は、研究者の間では広く共有されていたと思われる。例えば、早稲田大学で人類学や古代史を講じた西村真次は、頭蓋学を解説した教科書のなかで人種の優劣に触れ、「長頭よりも短頭の方が望ましい」と述べている [西村 1926]。西村は鳥居が1916年に創設した武蔵野の歴史・地理の研究会である武蔵野会（現在の武蔵野文化協会の前身）の会員として、しばしば鳥居と共に活動した。
- 17) 鳥居は晩年の回想の中でも、1924年に自身が東京帝大の職を辞す契機となった松村瞭の博士論文審査に関して、松村が論文に部落民の遺伝形質などの研究内容を盛り込んでいなかった点に問題があり、その解明に取り組んでいれば学位授与に反対することはなかった、と述べている [鳥居 1953]。
- 18) プロカが率いた「バリ人類学」派は、ふたつの異なる種が交わったとき、その子孫にいかなる影響があらわれるか、という研究テーマに没頭した [竹沢 2001]。鳥居もこうした関心を共有していたものと考えられる。
- 19) こうした議論は、人種、性別、階級などにおけるすべての「劣等」グループに当てはめられ、議論された。例えば、成人の黒人や女性は白人男性の進化の過程における祖先の段階を示す生きた見本である、などといった発想から「人種の高等とか下等」がまことしやかに議論されたという [グールド 1998]。
- 20) ロンブローザらの犯罪人類学については、[清水 1997] を参照。
- 21) 例えば、沖浦和光は徳島での②の調査報告について、部落民が「ヤマト民族（日本民族）とは出自が違う異民族であるとする説」を打ち破る最初の試みだったと評している [沖浦 1991]。
- 22) 当時の知識人たちの間で広まっていた日本人を混合民族とする理解については、[小熊 1995] [坂野 2005] を参照。
- 23) 当時、東京人類学会は多様な専門知識を持つ研究者のみならず、歴史や文化に興味を抱く民間の研究者にも開かれており、学者から市井の好事家まで多くの人が集う組織であった。そうした会員のなかには、新聞報道や雑誌を通じて人類学に興味を持った被差別部落の当事者も含まれていた。同会会員には米田庄太郎が被差別部落関係者も名前を連ねている他、喜田貞吉や柳田国男、菊池山哉など部落問題研究に携わった知識人も確認しうる。
- 24) さらに後の1939年、岡本は徳島を訪ね、鳥居の部落調査の検証を試みている。これによれば、鳥居は同地での調査後、小学校長に宛て手紙で「高崎部落は天孫民族と同型である」旨を報告したとされる。これについて岡本は「部落民は人種が違ふ劣等民族であるかのやうに思ふてゐる世人の蒙を啓く好資料」である、「これで部落民は元来は優秀民族であること

を専門家の科学的調査で立証されたのである」と述べている〔岡本 1941〕。しかし本稿でみたように、岡本による説明は鳥居の調査結果および彼の理解とは異なっている。

- 25) 時代は異なるものの、現代の生命科学における人種・エスニシティ研究の言説に孕んでいる社会的権力性とも通じる問題がすでにこの時代に現れていたとみることもできよう。ヒトゲノム研究者が行う遺伝学的な人種・エスニシティ研究と、現実社会との緊張関係を論じた研究として〔加藤 2009〕を参照。

### 参考文献

- アバ, ラファエル (2009) 「鳥居龍蔵の考古学思想の学史的検討「固有日本人」説を中心として」『北大史学』第49号。
- 大野延太郎・鳥居龍蔵 (1894) 「堅穴ニ類スル小舎東京近郊ニ現存ス」『東京人類学会雑誌』第9巻第95号。
- 岡本弥 (1941) 『融和運動の回顧』光風文庫。
- 岡山真知子 (2010) 「鳥居龍蔵の日本国内調査」『坪井清足先生卒寿記念論文集』坪井清足先生の卒寿をお祝いする会。
- 沖浦和光 (1991) 『水平＝人の世に光あれ』社会評論社。
- 小熊英二 (1995) 『単一民族神話の起源』新曜社。
- 加藤和人 (2009) 「ヒトゲノム研究における人種・エスニシティ概念」竹沢和子編『人種の表象と社会的リアリティ』岩波書店。
- 菊池山哉 (1923) 『穢多族に関する研究』三星社書店。
- グールド, スティーヴン・J (1998) 『人間の測りまちがい』鈴木善次・森脇靖子訳, 河出書房新社〔1996〕。
- 黒川みどり (2010) 「被差別部落民の由緒の語り」『由緒の比較史』青木書店。
- 工藤雅樹 (1979) 『研究史 日本人種論』吉川弘文館。
- 礪川全次 (2006) 『異端の民俗学』批評社。
- 坂野徹 (2005) 『帝国日本と人類学者』勁草書房。
- 清水裕樹 (1997) 「「生来性犯罪者」の誕生」『法学政治学論究』第35号。
- 末成道夫 (1988) 「鳥居龍蔵」綾部恒夫編『文化人類学群像3』アカデミア出版会。
- 関口寛 (2007) 「初期水平運動と部落民アイデンティティ」黒川みどり編『〈眼差される者〉の近代』解放出版社。
- 関口寛 (2010) 「水平運動における「民族」と「身分」」黒川みどり編『近代日本の《他者》と向き合う』解放出版社。
- 竹沢尚一郎 (2001) 『表象の植民地帝国』世界思想社。
- 田畑久夫 (1997) 『民俗学者鳥居龍蔵』古今書院。
- 田畑久夫 (2007) 『鳥居龍蔵のみた日本』古今書院。
- 坪井正五郎 (1886) 「足利近傍の賤民」『東京人類学会報告』第2巻第9号。
- 坪井正五郎 (1893) 「刑事人類学の真価」『東京人類学会雑誌』第93号。

- 坪井正五郎（1898）「東京人類学会創立第14年会演説」『東京人類学会雑誌』第152号。
- 寺田和夫（1975）『日本の人類学』思索社。
- 富山一郎（2002）『暴力の予感』岩波書店。
- 鳥居龍藏（1897）「穢多に就ての人類学的調査」『東京人類学会雑誌』第13巻第140号。
- 鳥居龍藏（1905）「飛越能地方人民の頭形」『地学雑誌』第17巻第193号・194号（『全集』第4巻）。
- 鳥居龍藏（1918）『有史以前乃日本』磯部甲陽堂。
- 鳥居龍藏（1936）「学界生活五十年の回顧（一）」『ミネルヴァ』第1巻第8号。
- 鳥居龍藏（1953）『ある老学徒の手記』朝日新聞社。
- 中園英助（1995）『鳥居龍藏伝』岩波書店。
- 西村真次（1926）『体質人類学』早稲田大学出版部。
- ベルツ，エルウィン・V（1973）「日本人の起源とその人種学的考察」池田次郎訳，同編『日本人種論』平凡社〔1883 - 1885〕。
- 前田速夫（2004）『余多歩き 菊池山哉の人と学問』晶文社。
- 松澤員子（1993）「鳥居龍藏の台湾調査」佐々木高明編『鳥居龍藏の見たアジア』国立歴史民俗博物館。

